剣道部

設 立	1966 年 4 月
部 長	澤田 達男（機械工学科）
現在の部員数	70 人（2013 年 4 月現在）
OB/OG 会代表者	鈴木 秀人（27 期機械工学科）
OB/OG 会会員数	270 人
U R L	http://rikotaikendo.sakura.ne.jp /rikotaikendo/

藤原工大鍛錬部との関係

現在の剣道部は小金井時代に創部した。しかし、藤原工大予豫誌創刊號には、20 名余同志により創部と書かれている。3 期川田壽郎先輩（剣道部名誉 OB 会員）が初めての理工体有志団体による矢上祭パネル展示会場に、藤原工大徽章を着けて来場され、剣道部があることに感激されていた。その折、川田先輩から当時の様子について次のような話を伺った。稽古場所は、渋谷の講武館と豫科誌に記載されているが、もっぱら運動場の横で稽古していた。陸軍に志願し上海に従軍、復員後は藤原工大がどこにあるか探してようやく溝の口で復学したが、部活動どころではなかった、とのお話であった。全日本剣道連盟の記録によれば、GHQ（連合国総司令部）は、War guilt information program に沿って、柔道、剣道、弓道、空手を、軍国主義を象徴するものとして禁止した。とりわけ神道の流れを重視する剣道は、他の競技が順次解禁されていったのに対し、1952 年まで活動を認められなかった。もちろん私道場で細々とは続けられていたものの、学校競技としては 7 年間も途絶えていたことになる。

小金井時代

したがって工学部体育会組織には剣道部がなかったため、1965 年入学の 1 期生（工学部 27 期）が 1 年生のとき（日吉の教養課程）体育会部員として活動を開始。2 年の専門課程から小金井にて 6 人で同好会を創部。翌年新 2 年 7 人が入部しクラブの体をなす。

小金井に道場があるわけでなく、多磨霊園の空き地や校庭で稽古するなど劣悪な環境でも和気あいあいと活動していた。府中刑務所や国分寺剣道連盟への出稽古もよく行った。どうしても専用の道場が欲しくて、教室の机を移動し即席道場（油汚れがひどく正座ができない）を作ったこともあった。

また、早稲田など他大学工学部との定期戦（二季杯）も創設した（現在に至る）。二季杯は、早稲田大学剣道同好会、明治大学体同連剣道部、法政大学工学部で約 30 年続き、その後法政大学工学部が抜け、東京大学剣道同好会、中央大学剣影会の参加を得て発展している。

さらに翌年には 7 人が入部し活況をみせ始めたものの、相変わらず道場は無く、国分寺剣道連盟道場へ、当時の学生としては一般的ではなかったマイカーに分乗してさっそうと乗りつけるという、ちょっとカッコイイ文武両道をモットーとした部活が始まった。その後工学部体育会に加盟する。

矢上移転後

移転の混乱期

剣道部の 4 期から 5 期が小金井から矢上移転期にかかり、勧誘活動どころではなかったため部員数も減少した。また、ほぼ日吉復帰ということで、塾の体育会に戻る、という選択肢も検討された。しかし、工学部剣道部の OB は体育会剣道部の OB 会組織である三田剣友会には加盟できないということから、単独での活動を決定。会員数は少ないが、OB 会に稽古に必要な太鼓・部旗の寄贈を要請し、稽古環境は小金井時代と比べると格段に改善された。

さて、本来男くささが売り物であった剣道部ではあるが、5 期、6 期は部員拡大のため、「爪」を隠

1 期を囲んで

1 期～3 期合宿集合写真

3 期～5 期合宿

し「女子大とのダンスパーティーがあります」「各学科の過去問、研究レポート見本進呈」などを訴え、部員数を拡大できた。

また運動施設の確保やシャワー利用の優先権等を獲得したいといった稽古環境の整備を目的に、工学部体育会連盟の委員長職等に歴代幹部が就任してきた。体連の役員は小金井時代から担っており、矢上移転後も同様であった。当時体育館は剣道部がそのすべてを管理し、他のクラブは剣道部の了解の下、練習時間を調整していた。練習場所のない、体育会を目指していた全塾の少林寺拳法部や鍛心会、合氣道部なども、同様であった。工学部体育会少林寺拳法部は矢上移転後に創部したが、その前年のストライキ潰しで盟友関係にあり、日頃から親密な関係であった。

運動会実行委員長職も含めて、体連の委員長・役員ポストは、幹部部員の意識として引き継がれていた。もちろん、委員長ポストは他部と適宜交替はしていた。

勧誘活動も引続き順調に推移し、7 期、8 期、9 期、10 期と大勢の部員による活動となっていった。

発展期

この頃になると、部員の顔ぶれも多彩となった。塾高校からの入部ほか、全国から猛者が集まっており、国体やインターハイで県の代表経験のある選手も大勢入部していた。

対外試合でも好成績を収めていた。

キャンパスライフとしては、歴代剣道部が運動会実行委員長を拝命していた関係か、いつのころからか運動会終了後学部長室で、各学科の有志教員が集まる打ち上げに参加させていただいていた。

矢上における剣道部のプレゼンスが高まった時期である。この流れは 12 期から 17 期へと続く。

ただし 12 期以降は OB 会での評価がわかれている。12 期が 2 年生のときに、塾内でストライキがあったが、スト潰しのため 12 期部員は、少林寺拳法部、スキー部ほかの部員とともに集められて活

6 期、7 期、8 期主力の夏合宿

動した。全塾の体育会とも連携を取り、ストを収拾に導くことができた。その活動の中で体育会、なかんずく工学部体育会剣道部のあり方をどうするかが 12 期幹部の共通課題となった。

まず、統制型マネジメントを導入した。これまで強制ではなかった通学時の学生服着用。ツナギ・白衣は OK とするも授業にはなるべく学生服を着用すること。体育会の学生らしく、矢上塾生の模範となるよう行動する規範を設けた。ワイシャツ、黒い革靴に黒ストッキング、ハンカチは白、詰襟はつねにホックすること……。

稽古は、夕方は無断欠席厳禁。朝錬、昼錬も取り入れ、厳しさを徹底。幹部ほか、幹部候補は昼休みに必ず部室に集まり、意思統一して一体感を醸成。稽古後羽織るお揃いのジャージを新調した。

全部員が剣道部部員であることに誇りをもてるよう、日頃の活動・言動をマネジメント。

先輩方が恒例としたダンスパーティーは、いつしか合コンとなってだんだん縮小し、戦う集団に変貌した。この傾向は 22 期ごろまで続くが、そのころから剣道部は厳しいだけのイメージで部員減少を招き、部として活動を停滞させてしまった。12 期～16 期あたりの強権運営が指弾されたのである。

一方で、澤田部長の熱心さから救われたとも言える。理工体剣道部は、全塾の体育会任命式にも出席できるようになり、体育会の一員であるという部員一人ひとりの意識だけは維持できていた。また 27 期、28 期、29 期と部員の減少が止まらないとき、体育会剣道部から合流してはどうかとの提案も受けた。それだけの実力者ぞろいであった世代でもある。

困難期

繰り返しとなるが、これまでの理工体剣道部の OB 会員は三田剣友会（体育会の OB 組織）には入れない。イコール理工体剣道部は消滅する事態になりかねなかった。この停滞感が払拭できないところに体育館の取り壊しがあり、再建までの 3 年間、31 期から 36 期が影響を受けた。

とにかく部の存続が最優先となり、厳しさだけでは、だめになった。また、このころから文科系の学生が部を救うことにもなってきた。30 期には、文科系学生としてはじめての主将（文学部）が誕生している。最大のピンチであった 35 期主将は経済学部生で、3 年生が 1 人しかいないため 2 年生時から 2 年間主将を務めた。

35 期主将のとき体育館が再建され、ようやく落ち着いた稽古ができるようになった。そこから少しずつだが部員も増え、部の体裁は戻った。このとき、OB 会組織を塾・現役に貢献する団体へと立て直す機運が盛り上がり、36 期から現在まで、順調に部員も増え活動も元に戻った。とくにここ 4 年は、入学時のオリエンテーション効果で、1 学年で 10 人を超える部員の入部が続いている。

OB の中にも、七段、六段の高い段位の方も多数登場。体育館の再建と同時に藤村先輩（教士七段、9 期）が監督となり、現在も指導いただいている。結果、昇段試験や大会成績もうなぎのぼりである。

大会参加結果・顕著な成績

1 期が企画・開催した二季杯であるが、初の優勝は、3 期、4 期、5 期が主力メンバーの時である（1969 年）。その記念写真で、不鮮明ではあるが、第 1 列は 3 期部員である。それから 8 年後、11 期、12 期、13 期のメンバーで優勝（1977 年）。写真は 11 期飯尾副主将が賞状をうけとるところで、写真奥の列先頭が 11 期杉戸主将。優勝カップを持っているのは徳永（11 期）。

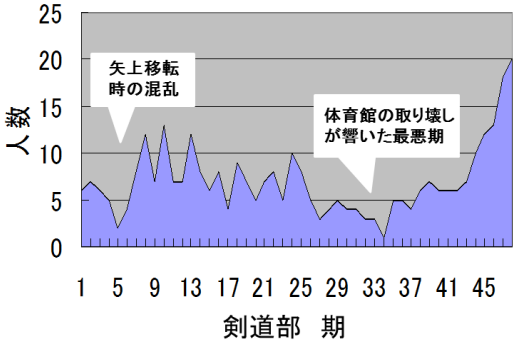
その後大会レベルは格段に上がり、なかなか優勝ができなかった。しかし、45 期、46 期が主力のチームが 33 年ぶりに優勝し、2012 年 11 月には 46 期、47 期チームが連覇している。

初の二季杯優勝、3～5 期　1969 年

二季杯優勝の表彰　飯尾副主将 1977 年

新日本製鉄君津剣道場での合宿

45 期～46 期二季杯優勝 2011 年



部員数の変遷

関東理工科系剣道大会では、10 期が新人戦で団体 3 位入賞。本大会も全日本学生剣道大会で、上位に入る大学も参加しているため容易には入賞できなかった。こちらの大会でも 33 年ぶりに 43 期が新人戦で 3 位入賞した。とくにこの大会は日吉記念館で開催され、喜びもひとしおであった。

現役の活動状況

ここ数年、勧誘活動の幅が広がり部員数は増勢の状況。OB 会組織も一応の整備も完了し、監督・コーチの派遣、資金面の支援など充実した。

藤村監督の下、「創意」「熱意」「誠意」の三意をもって、剣道の「修行」を通じ、稽古が人間としての成長につながることを目的として活動。また、それが学生剣道で終わることなく、卒業後も息を長く剣道を続けられることも目標に掲げている。

現在週 4 回稽古している。夏合宿、春合宿はそれぞれ 5 日程度の日程で行っている。対外試合は、関東理工系剣道大会年 2 回、二季杯年 2 回、首都圏親善大会 1 回、関東学生親善大会 1 回に参加。塾内では、塾内対抗戦および体育会主催の剣道祭、全塾の寒稽古に参加。その他、弐・参昇段審査、四･五段昇段審査受験。四段保持者は体育会をも凌ぐレベルである。

女子部員も多数稽古に参加し、最近では海外留学生も入部している。カナダからの留学生は、女子でありながら 3 年間稽古に打ち込み、他大学の研究科でも続け、剣道の教員となっている。

OB 会組織の概要

OB・OG 会を年 1 回年度末に開催。当日は、現役との稽古会もしくは対抗試合を開催。OB 会の組織率の向上に合わせ、OB 会意思決定の迅速化のため理事会方式に変更した。学生強化担当理事、支援担当理事、体育会等渉外担当理事制にて運営している。また創部年次に合わせ 5 年ごとに大 OB・OG 総会を、学生、教授との懇親、資金支援を目的に開催している。組織化の危機感は、前述の通りである。OB 会の存在価値があれば、体育館の取り壊し時にも代替施設の交渉もできたはずである。今回の 75 年記念事業は、OB 会の意義をアピールできる良い機会となった。この点の認識を引続き啓蒙していかなければならない。

慶應義塾大学理工学部剣道部年表

西暦	理工期	剣道部期	部長(敬称	主将	状況
1967	27	1	越塚信行	廣瀬　茂男	創部
1968	28	2		吉原　幸雄	部としての体裁が整う
1969	29	3		伊藤　恒二	二季杯初優勝
1970	30	4		伊藤　重隆	体育会連盟副会長輩出
1971	31	5		村樫　信行	移転の混乱を収拾
1972	32	6		稲見　俊文	体育会連盟会長輩出
1973	33	7		星　　幸弘	部員数の定着
1974	34	8		塩沢　　丘	塾高校から強力なメンバー揃う
1975	35	9		鈴木　　博	稽古の虫世代。藤村監督の現役時代
1976	36	10		緑川　克美	関東理工科系剣道大会3位、掛稽古世代
1977	37	11		杉戸　泰成	二季杯優勝
1978	38	12		星野　広友	痩せ我慢と理不尽に堪える世代
1979	39	13		水沢　　均	稽古の鬼。ただし初めて女性部員2名
1980	40	14		斉藤　一也	実力派揃い
1981	41	15		満留　友和	ユニフォームを揃える
1982	42	16		仙石裕次郎	女性部員が増える。一時期6名
1983	43	17		村田　孝一	これよりしばらく安定期
1984	44	18		熊沢　洋一	
1985	45	19		玉木　輝幸	
1986	46	20		小菅　靖浩	
1987	47	21	澤田　達男	大林　聡之	
1988	48	22	内山　太郎	岩垂　　史	
1989	49	23	内山　太郎	秋山　和則	
1990	50	24	澤田　達男	杉崎　文亮	
1991	51	25		川崎　直人	
1992	52	26		當麻　　肇	
1993	53	27		上野　武彦	部員減少期ながら、実力派揃い
1994	54	28		岩井　博幸	
1995	55	29		大澤　隆治	
1996	56	30		石原　卓治	初の文系主将
1997	57	31		宮田　　諭	体育館取り壊し
1998	58	32		飯尾　武弘	出稽古で凌ぐ
1999	59	33		小見門利行	
2000	60	34		塩幡　勝典	34期１名のため2年生塩幡が主将就任
2001	61	35		塩幡　勝典	2期目。新体育館竣工。藤村監督就任
2002	62	36		橋本　　渉	
2003	63	37		奥田栄一郎	徐々に部員数が回復
2004	64	38		下高原充裕	
2005	65	39		須加　翔太	
2006	66	40		佐藤　功規	
2007	67	41		鮫島　　賢	
2008	68	42		長谷　拓卓	
2009	69	43		吉住　　修	
2010	70	44		阿部　　聖	
2011	71	45		西原　　諒	二季杯33年ぶり優勝
2012	72	46		村上　了太	二季杯連覇
2013	73	47		宮垣　知武	